

「父が語ってくれた戦争」

まっちゃんさん(匿名)(昭和13年生まれ)

私がまだ四・五才だった頃父は南方へ出征し、たまに家族に顔をみせにくるぐらいでした。戦地にかえり、家で母と外に出ると遠くの空が夕焼の様に赤く B29 というアメリカ軍の飛行機がしょうい弾をおとしていると教えてくれました。また白衣、杖の兵隊さんが、ハモニカを吹き前の空缶に小銭が入っているのがみられました。空には気球がうかび、私も千人針の一さしでも良いといわれさしてあげたのをおぼえています。

六才になると関東の山のある農村に母、兄姉、次姉は集団疎開から帰り末っ子の弟が母のお腹に、八人で農家の二階に引越しました。布団、鍋かまだけで後で長姉と長兄が東京の下町の我家へとりにいったらまるやけでした。食糧も母が着物・帯を野菜麦などと物々交換しタケノ子生活でやりくりしていました。

やがて日本が負けて父も無事にかえってきました。そんなとき私以下の妹弟にはなしてくれました。海軍兵だった父は、ガダルカナルの海上で軍艦に乗って夜寝ていたらずどんと衝撃があり、海の底にすーとすいこまれ、もがいていたら、ゲートル、外套が浮力となり海面にうきあがりイカダにひろわれたそうです。頭や顔にケガをした人が天皇陛下バンザイ、お母さんありがとうさようならと暗い海に沈んで行ったと…。

ああ弟よ、君を泣く君死にたまうことなけれ親は刃をにぎらせて二四までを育てしや。かの有名な与謝野晶子の詩をまぜ入れて、中学生になった私は反戦の作文を全生徒の前で壇上で朗読をしましたボロボロの下駄ではみっともないと思い前に並んでいる友達にかりて……。疎開っ子といじめられたこともありましたが、その頃はもう田舎の元気な子供でした。桑の実や山の木いちごなどかけめぐって空腹をしのいだこともあります。

上京して結婚し子を育て老きょうになった今平和な日本で良かったと、世界は侵略、内戦、宗教がらみのあらそいで女性、子供が犠牲になっています。テレビなどでみると胸がいたみます。早く大切な人の命をうばう戦争はやめて欲しいと思い第二次世界大戦をみてきた自分の生活と父の体験を書いてみました。以上

令和6年7月2日 寄稿